
クロノス

草薙千里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クロノス

【Zコード】

Z0754A

【作者名】

草薙千里

【あらすじ】

剣道部2年の飯田晴彦は、放課後ふと足を向けた美術室で、クラスメイトの美少女宮口久美子と出会う。彼女は表向きは普通の人間だが、実は、類い稀なサイキック能力者であり、謎の時空テロ組織「クロノス」と戦う国際平和組織「（サイ）」の戦士だったのだ。やがて、平凡な生活を送っていた晴彦も、クロノスとの熾烈な戦いの渦に巻き込まれていく。・平和だった学園都市に今まで経験したことのない未曾有の危機が迫る！！

序章～暗黒の使者

その日の放課後、晴彦の足は美術室へと向かつて いた。

夏の夕暮れ、午後7時近いこの時間にはほとんどの生徒も帰^モしている。

わずかに熱心なバレー ボール部が体育館に残り練習していた。

晴彦は聖陵高校剣道部の2年だが、

今日はミーティングに切り換わり稽古が休みになつたのだ。
県でも強豪に入る厳しい剣道部だが、こいつはめつたにあるものじゃない。

実は、晴彦はこの高校に入学時に剣道と美術と部活でどちらをとるか迷つたことがあつた。

「絵は1人でも描けるから・・それに男は体力だ」という実に単純な理由で剣道部に決めたのだが、今でもそれは間違いじやなかつたんだと思う。

だが、今日はなぜか美術室を覗いてみたくなつたのだ。

本来は眞面目だが、気分屋のところが晴彦にはある。

「おつ、誰かいるのかな・・?」晴彦はつぶやいた。

誰もいないはずの美術室にまだ照明がついているのだ。

「まさか、美術部の誰かが残つて描いてるのか?・・まあ、いいや。こじまで来たんだ」

美術部には写真部といつのもあって、もしかしたらマニアックなそいつらかもしれない。

「やつら、またエロい写真でも焼いてるのかもしねーな。よーし

美術室のドアを横にそっと音を立てないように開けると、人影はなかつた。

「なんだ、誰もいねーじゃん。つけっぱなしかよ。」

「誰・・・!?」突然、女の声がした。

「え?」

「飯田くん!」飯田とは晴彦のことだ。

「あれ?・・・み、富口さん!?」

「何してるの?」と彼女は驚きを隠せないよつこつぶやいた。

富口久美子は2年3組のクラスメイトだが、あまり話したことない。

・・・と言つよりは男どもは誰一人として彼女には話しかけられないと言つたほうが正しい。

久美子は学校1の美人であり、親が大きな会社を持つ財閥令嬢でもあるのだ。

同じクラスの女性徒や担任でも彼女には一目おいている、言わば近寄りがたい存在なのだ。

「いやー・・なんつーか。ははは・・まさか君がいたとは。」晴彦

もなんとも言ひようがない。

久美子は怪訝そうに晴彦を見ている。

「いや・・あの、たまには美術室に顔を出そつかと思つてさ」「貴方、いつから美術部員になったの？」

「いや、俺は剣道部です。はい・・」頭をポリポリと搔くしかない晴彦だったが、

誰もいない美術室にみんなの憧れの美人と二人きりといつこの状況はかなりドキドキものだ。

久美子はすらりとした長身で、長いストレートの髪が窓から入る風に揺れていた・・。

スケッチブックを胸に抱えて、涼しげな瞳をむける久美子には言い知れない神秘的な空氣さえ感じられた。

「そう言えば、飯田君も絵が上手だったわね・・」

「え？ そうかな？・・あはは」

「美術の時間に飯田君が描いた絵を見たけど、すぐよく描けていたわ・・」

「そ・・そですか」

「岡田先生も言つてたわよ・・どうして飯田君は美術部に入らないで剣道なんかやつてるんだうつって・・だって美術部員の誰よりも上手に描ける人なのに・・」

「うへへん。へへへえ・・ああ、そなんだ・・」頭の次には脇を搔いている晴彦だったが、

「・・でもこんな時間に富田さん、何してんの？」

「え？わたし、スケッチブック忘れたの。それだけ」なんだか取り繕つて答えているようにも晴彦には見えた。

「私これから帰るところだから、電気は消していいってね。」

「え？もう帰るのか？」

「じゃあね」

久美子はまるで逃げるように、晴彦を残して出て行ってしまった。

「あ～～あ・・せつかくのチャンスかもしれないと思つたのになあ～。まあ、こんなもんかな～。」

「しつかし俺も未だに美形には免疫がね～な！まあ、毎日汗臭い男どもと竹刀ばつか振り回してるからこいつなるんだな・・・」

1人取り残されてしまつて、今や美術室など見る気持ちも失せてしまつた晴彦は「さあ～て！帰るかな～」と、ぐるりと見渡してからそつそつと竹刀を放り投げ、机の上に落とした。

「ゴトーン・・・痛つ！」

その時、晴彦のつま先に何か奇妙な丸い石がぶつかつた。

拾い上げると、それは石ではなく今まで見たこともない金属だつた。

軽石のように軽いが、非常になめらかな金属の表面にしては恐ろしく硬度があるようだつた。

しかもその中心には（サイ）のマークの透明なセラミック状のものが埋め込まれている・・・。

「なんだ? ハレ?」

「デッサンに使うオブジェにしては変な代物だな・・」

すると、その時、その不思議なオブジェの（サイ）の部分が突然金色に光り始めたのだった。。。

ツーッーという電子音が聞こえていた。

「なんだろう・・・」れ？」

そう思いながら、いろいろ触つてみたが反応がない。

「まいったな、彼女の忘れ物かもしれないし・・・けど、なんだこれ？」

晴彦がそつそつとたん音は鳴り止んだ。

ガラツ・・美術室の扉が開いた。

「なんだ、飯田か！・・今じろなにしてるんだ？」

そう言つて現れたのは、美術教員の岡田先生だつた。
年齢は40歳近いが、くだけた人懐っこい人柄で、男女問わず生徒には人気がある。

「なんだ、岡田先生があ・・」と晴彦はしょげる。
一瞬、久美子が戻ってきたのかと思ったのだ。

「なんだは、ないだろーが（笑）。お前、美術部員でもないのに、
何しとるんだ？早く帰れ」

「はいはい。帰りますよ」「先生は帰らないんですか？もう遅いですよ」

「はははは・・俺は、この学校の用心棒だからな。校舎を見回つたら帰るよ」

用心棒と言つてゐるが、岡田はかなり鍛えこんだ体をしていて、それこそ、オリンピックの体操選手のような筋肉質の体型をしていた。

頭も東大に入れるくらい良かつたようだが、絵を描くこと、子供が大好きだったので、

高校教師になつたのだと岡田本人から聞いたことがある。

「じゃあ、先生、俺はこれで・・・」と晴彦が言いかけた時、突如、ジリリリイリイ――――――――――と校舎に警報機が鳴り響いた！！

岡田「火事・・・か！！」

晴彦「先生・・・マジで火事かも！どこだろ！？」

その時だつた。ズシイイイーン！と校舎が縦に少し沈んだかと思うと、大きな揺れが起つて、2人ともがくんとバランスを崩した。

「うわあつ！？」と晴彦は床に倒れながら叫んだが、岡田はしつかりバランスをとつて立つていた。冷静に周囲を注視している。

「まさか、やつら……とつとつ始めやがつたか！！」とつぶやく岡田の横で、ロダンやヴィーナスの石膏が落ちて割れた。いろんな物がガタガタと異様に揺れ動いた。

闇の中で地響きにゆれる灰色の校舎。美術室の電灯がまばたく。そして消える。

バチッ！という音がして、今度はパアツ！…と外が明るくなつた。そのままゆい光が、緊迫して汗が浮き立つた岡田の恐ろしい形相を一瞬だけ映した。

「アアアアアアア…」…という地鳴りとともに、その不気味な揺れは消えていった。

いつしか警報も鳴り止んでいる……。

晴彦「先生……なんですか、今の？ただの地震とは違つうな……」

岡田「君はもう帰りなさい」

いつになく低く緊張感のある声でつぶやいた岡田の表情は硬く引き締まっていた。

その声は、まるで機械仕掛けの声のように、低く人間味がない。

いつもニコニコと、くだらないジョークを振りまいて生徒を笑わせてくる岡田ではない。

そこには、別人の岡田がいたのだ。

晴彦はふと思つた・・・。

そう言えど、宮口さんも、なぜ、一人でこの美術室にいたんだろうか・・・。

岡田は、さつき「やつら」と言つた・・・「やつら」つていつたいなんなのだろうか・・・。

いや、それより、家のことが心配だ。
あれだけの地震なら、街中で倒壊はもちろん火事だって起こつたかもしぬれない。

外に出ると、高台にある聖陵高校から、街の夜景が見下ろせた。
震度6近い地震があつたというのに、街は何事もなかつたかのように穏やかに静まり返つてゐる。

救急車もパトカーも走つてはいない。普通に人も歩いている・・・。

晴彦「そ・・そんな・・・・どうこうことだ??

「あれだけの地震があつたのに・・・まさか、学校だけ・・・??
そんな馬鹿なつ・・!」

その時、暗がりから人影が動いた。

ハツとして晴彦が振り向くと、あの宮口久美子が見たこともない銀

色に光る銃を向けて立っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0754a/>

クロノス

2010年10月27日13時55分発行